

資源の共同管理政策から始まった ヨーロッパの多言語主義

言語と社会の関係について、ヨーロッパでは50年以上前からさまざまな取り組みが行われています。「多言語主義」という言葉は日本でも10年ほど前から聞かれるようになり、近年では「複言語主義」という言葉も現れるようになりました。この二つはどう違うのか。これを歴史的観点から考え、言語教育思想としてそれが意味するものを一緒に考えてみたいと思います。

多言語主義はそもそも欧州連合(EU)から生まれました。欧州連合の起源は1951年にさかのぼります。この前身である欧州石炭鉄鋼共同体は、フランス、西ドイツ、イタリア、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグというヨーロッパ6カ国で結成されました。過去3度の戦争の重要な要因になった、国境をまたぐ鉄鋼・石炭資源の共同管理によってヨーロッパに平和をもたらすことが、この共同体の重要なテーマだったのです。そしてこの共同体の結成にあたり、加盟国すべての公用語、つまりフランス語、ドイツ

レクチャー

多言語主義から複言語主義へ ヨーロッパの言語教育思想の展開と深化



京都大学人間・環境学研究所
外国語教育論講座准教授

西山 教行

語、イタリア語、オランダ語の4言語を共同体の公用語にすることが多言語主義の出発点にあたります。ここに、それぞれの加盟国が対等の資格で共同体に関わっていったという、いわば民主主義の原理があるわけです。

57年にはローマ条約によって欧州経済共同体ならびに欧州原子力共同体が成立し、67年に欧州石炭鉄鋼共同体、欧州経済共同体、欧州原子力共同という三つの共同体が統合して欧州共同体(EEC)ができます。73年の第1次拡大でイギリス、アイルランド、デンマークが加盟し公用語は6言語になり、その後も81年、86年、95年、04年と拡大が行われ、07年には第6次拡大でルーマニア、ブルガリアが加わり、アイルランド語が公用語としての加盟申請をしたために公用語は計23言語になりました。このように加盟国の増加にしたがって共同体の公用語が増えていき、多言語主義が拡大するというプロセスが認められます。

言語間の民主主義

公用語が増えていくことは多言語主義の現われと言えますが、ここには、加盟

国の各国語が平等であるという原則が働いています。ヨーロッパには「ヨーロッパ語」という言語はなく、ある特定の国の言語を公用語にすることもしない。加盟国がすべて同じ資格で参加することが民主主義の原理である。とりわけ加盟国は自国語で発言でき、EU市民は自国語でEUへの政治参加ができる。それによつてEU域内に暮らす市民は、平等に誰もが同じような政治情報あるいは経済情報を手に入れる。ここに民主主義の原則があるという考え方です。

欧州委員会の全体会議は、公用語すべての通訳を配置しています。ただし、小さな委員会にまですべての言語が同じように発言する機会を設けるには通訳コストが膨大なものになりますから、実際の作業レベルでは、英語、ドイツ語、フランス語の三つの言語が作業語になっています。全体の欧州委員会や全体会議では公用語すべての通訳を配置しているため、03年のデータによれば毎日700人の通訳と、それについて110通りの組み合わせがある。この通訳の問題はEUの運営上、非常に重要な問題となっています。

この通訳コストは大変に大きなものであり、現在5億人弱と言われるヨーロッパ市民の一人当たり、年間2ユーロの負担となっています。総額ではとてもない数字ですが、これを高いと考えるか安いと考えるのかは非常に微妙なところです。農業国の多いヨーロッパでは、牛への補助金が1頭あたり約2ユーロと言われています。1頭の牛と言語問題とに対して、一人の市民がそれぞれ2ユーロを払っている。ヨーロッパ人によれば、これこそが民主主義のコストなのだ。民主主義とは非常にコストがかかるものなのです。

今なお続く英独仏の3言語体制

これだけを見ると非常に理想的な印象も受けますが、実態は必ずしも多言語主義は「すべての言語は平等だ」として機能しているわけではありません。ヨーロッパ統合初期の20年近くはフランス語が重要な言語でしたが、年を追うごとに英語が増えていき、対照的にフランス語は減っていく。グローバリゼーションの展開する近年はますます英語が増えていきます。90年代の前半から後半にかけて英語

のシェアは次第に上昇し、英語以外の言語のシェアの下がる状態が国際社会の中に認められます。

今後、欧州連合はどんな方向に行くのでしょうか。加盟国の増加につれて公用語が増えるわけですから、それに伴って通訳の数が増える。現在23言語ですから、通訳の可能性だけを考えると400通り以上になる。それが今後はさらにトルコも含めて加盟申請を検討している国はあるわけで、増えれば増えるほど言語問題が複雑になる。経済的に高いものになる。果たして、そこまで民主主義のコストというものを通訳や翻訳に費やすことができるのか。

そこで欧州議会は「ピボット言語」という、英仏独による通訳体制を提案しています。ただ、いくつかの言語を選んで公用語にするというのは非常に合理的で妥当だと考えられますが、その場合どの言語を主要言語として選ぶのかという点が非常に難しい。人口面で考えると、英語の母語話者数はけっして多くありません。では、ヨーロッパ内に限って考えればよいのかと言うと、世界的に見た場合、明らかにスペイン語の母語話者が多い。

ポルトガル語も非常に大きな母語話者を持つている。言語数を決める基準が解決できていないため、この提案はまだ決定はされておらず、委員会は英独仏の3言語による体制を支持していくようです。EU全体の公用語問題は当面のところ、加盟国すべての言語を公用語とするという考え方で、それはヨーロッパの言語文化の豊かさにつながるのです。

社会政策としての 言語教育プロジェクトの発展

次に、欧州評議会の言語教育政策について見てみましょう。欧州評議会とは欧州連合に先立って1949年に結成されました。第二次世界大戦中にチャーチルはヨーロッパ合州国という理念を語りましたが、欧州評議会はその理念をある程度戦後に実現していったもので、現在では旧ソビエトの国々を加えて46カ国が加盟しています。結成の目的は、民主主義と法の支配の保護、人権の保護、ヨーロッパの文化的アイデンティティと多様性の促進の三つです。この欧州評議会こそが戦後ヨーロッパの中で、さまざまな言語教育政策を提出してきました。加盟国

すべての言語を公用語とする欧州連合と異なり、欧州評議会では英語とフランス語のみを公用語としています。議員の会議ではドイツ語、イタリア語、ロシア語も使用されますが、いずれにしても選択的な多言語主義が導入されている。そこには言語教育について、次のような原理があります。

第一は多言語主義です。ヨーロッパ市民は母語に加えて、複数の言語によるコミュニケーション能力を獲得します。そして言語的多様性。ヨーロッパをEUの範囲で考えるならば、ほぼインドと同じくらいの大きさです。200以上の言語があるインドの言語的多様性と比べると明らかに少なく、ヨーロッパの中に土着の言語は約60と言われています。

なぜ言語的多様性を一つの特色にするかというと、60あるヨーロッパの言語のほとんどが標準化され文字化されている言語であるという点と関連があります。かつては文字化されていなかった言語も現在では文字化されています。それに対してインドやアフリカであれば、同じ地域で同じ大きさの地理的条件を考えた場合、多くの言語は文字化されていない。

つまりヨーロッパの多言語状態は、いわば整備された多言語状態なのです。その中で、すべての言語は等しい価値をもつと主張するのです。いわば条件付きの多言語状態にあると言っていると思います。

第二に、相互理解という問題があります。言語教育の目的は互いを理解することであり、市民の多言語能力によって多言語社会の民主化や社会化に関与することができます。言語学習は、個人の発展、教育、雇用、移動など機会均等を確保するためのものでとりわけ現在では社会統合という観点から、言語教育の果たす役割がますます大きくなっています。つまり移民の問題が重要になってきているのです。つまり欧州評議会の場合、言語教育政策は社会政策の一環として語られることが多いのです。

このような政治文化的観点から、また設立の経緯から出発して、1954年に欧州文化協定が締結されます。これは教育・文化・青少年スポーツに関する協力政策の枠組みを決めるもので、加盟国に各国の言語・歴史・文明の学習、自国の言語・歴史・文明の研究を奨励するもの

です。すなわち文化協定を締結した国に、相互の言語学習の振興を求めている。原理的には、隣国の言語、加盟国相互の言語を学ぶという発想が非常に強い。それは相互理解という問題と深く関わってきます。このような文化協定に基づいて60年代以降、さまざまな言語政策がプロジェクト形式で展開していきます。

コミュニケーション・アプローチの発展と言語教育の民主化

第一期のプロジェクトは63年から72年まで繰り広げられたもので、言語教育の民主化の推進に関わります。ヨーロッパでは長い間、言語教育、外国語教育は一部の少数エリートのためという観点が強かった。外交官のような専門職や学者など特殊な人のためのもので、一般の人々が外国語を身につけるということはあまり問題になりませんでした。それをさらに民主化するために、ラテン語やギリシヤ語などの古典語ではない、現代語教育を推進し、そのために教授法を整備しました。また60年代から70年代にかけてはオーディオ・ビジュアル・メソッドが開発されました。このころからコミュニケーション

ーションというものが言語教育の中で課題となつていきます。

第二期は71年から77年にかけてで、この時代に「スレシヨールド・レベル」というものができ、非常に重要な問題となつてきます。これは一種の「概念・機能シラバス」です。概念としては一般概念、特殊概念、そして機能としては、挨拶をする、道を尋ねる、買い物をするなど、さまざまなスピーチアクトに言語が分類されています。これは学習者が、サバイバルレベルを超えた機能的なレベルで外国語を利用するにはどのような能力を身につけたらよいかを記述する資料集で、個人が行う外国語によるコミュニケーションの、最小レベルが記述されています。これは後ほど触れますが、「ヨーロッパ言語共通参照枠」のB1レベルにあたり、Threshold Level、訳すと「しきい値」といいます。イメージとしては、学習者が外国語の世界へ行くには敷居がある。それを越えて外の世界へ行くと、外国語を使って自由にさまざまな所へ行けて何かができる。敷居というのは、自分が今いる母語の世界と異言語の世界を隔てる扉です。このThreshold Levelが、コミ

ュニケーションへ向けた言語教育を統べる上で非常に重要な役割を果たし、コミュニケーション・アプローチの原理になつていくわけです。

81年から88年の第三期には、教員養成プログラムや学習目標の設定、自律学習という問題が出ています。89年から97年は第四期。92年にはヨーロッパ現代語センターがオーストリアのグラスに開設されています。この年代は89年のベルリンの壁の崩壊を受けて、中欧・東欧諸国が自由主義社会へと参入し、次々にヨーロッパ文化協定に調印する時代です。

これは何を意味していたか。中欧・東欧、旧社会主義の国が扉を開いて見知らぬ資本主義の社会へと歩み出すことにより、言語教育がいつそう民主化をするということと深い関係にあります。ソビエトの崩壊とともに衛星国ではロシア語教育がなくなり、代わりに西側の言語が外国語として東側の世界へ入っていく。西側の言語の学習者が一挙に拡大したため、少ない教師でいかに成果をもたらすのかといった、自律学習という問題が重要になってきます。そこで91年のスイスのシンポジウムにおいて、「ヨーロッパ

「言語共通参照枠」と「ヨーロッパ言語ポルトフォリオ」の作成が決定されます。これが重要な出来事になっていきます。

言語能力の可視化をねらった「ヨーロッパ言語共通参照枠」

このヨーロッパ言語共通参照枠が作られた目的は、各国の教育機関の協力を促進する、言語教育における各国の評価を相互承認する、学習者、教師、教育関係者などのそれぞれの行動の位置付けを助ける、という3点でした。

ヨーロッパは次第に一つになりつつありますが、教育の問題はそうはいきません。例えば留学を制度的に行うためには、受け入れ校と送り出し校との間に協定がなければなりません。しかし教育制度は国によって違うため、相手国に留学した場合の成果をひとたび承認することは、けっして容易なことではありません。言語教育のレベルについても、それぞれの国の機関がさまざまな評価体系をもっています。そこで能力の可視化を図ろうとしたのが参照枠の一つの目的です。参照枠は個別の言語を取り扱ったものではありません。文法用語など言語教育を語る

言葉は各言語によって異なります。言語教育の概念も、国が異なれば必ずしも同じではない。これまでヨーロッパの中で言語教育について論じる場合に共通言語がなかった。そこで参照枠という共通言語を作り、各国の相互理解を促そうと企てたのです。

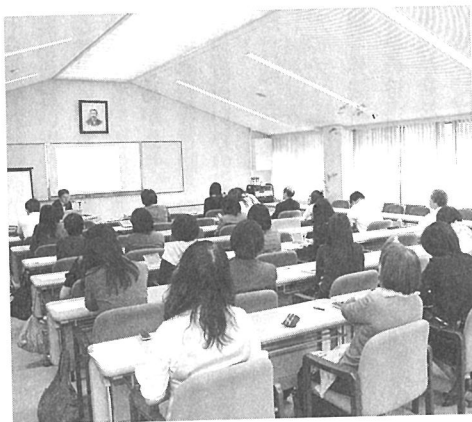
人員の交流や評価の透明化が根本にある参照枠を、教育学上、とりわけ評価のレベルで展開したものが「共通参照レベル」と言われるものです。3段階のレベルに分類し、それをさらに2段階に分ける。技能については五つに分類した。5技能が6段階に対応しています。共通参照枠の重要な目的の一つは多言語教育です。したがって一つの言語だけについて、例えば4技能ないし5技能を完璧にネイティブのように習得することは目的にいていません。複数の言語について、自分はある言語については話せるが読むことはできないなど、さまざまな言語のレバトリリーを増やすことをねらっています。

しかし「言語共通参照枠」は学習者に向けられたものではなく、カリキュラムを考える先生などに向けられたもので

す。それが学習者に向けられたものとしては「ヨーロッパ言語ポルトフォリオ」があります。これは自己評価に関わる装置で、人的移動の促進を目的とします。さまざまな異言語学習を促進し、複言語、複文化学習の価値を高めて相互理解を促し、自律学習、自己評価を進める。ポルトフォリオの役割には、就職時の面接の際に自分の能力を外部に示すことなどが一つの具体的な関心としてあります。

多言語主義と複言語主義との違い

欧州評議会が進めてきた言語政策、とりわけ2000年、01年に刊行された『ヨーロッパ言語共通参照枠』の中では、欧州連合の進めてきた「マルチリンガリズム (Multilinguism) 多言語主義」ではなく、「ブルリリンガリズム (Burlinguism) 複言語主義」という概念が提示されています。これはフランス語で、「バイリンガリズム (Bilingualism)」と非常に類比的な概念です。バイリンガリズムは2言語使用ですが、「ブルリ」とは2言語以上の言語を使用する個人や共同体という意味で、60年代以降使われてきました。



欧州連合の政治空間においては、複数の言語の平等な共存が謳われてきました。それは一つの主義主張という意味でマルチリンガリズムです。一個人が複数の言語を使用するという意味では多言語使用といった意味にも使用されます。すると、プルリリンガリズムとマルチリンガリズムはあまり変わらないのではと思うかもしれませんが、60年代以降にフランス語の文脈で使われてきた意味では、複数言語がいわば制御されていない、人間の手がそこに加えられていないようなま

まで存在するものがマルチリンガルだと言われてきています。それに対してプルリリンガリズムは人間の手がむしろ加えられた状態です。

複数言語が個人の中でどのような能力をつくり得るかという視点は、バイリンガリズムの研究から着想を得たものです。これまでの社会言語学では、複数言語があった場合には優位に立つ言語と劣る言語があると考えられてきましたが、プルリリンガリズムは、力関係というもので必ずしもとらえないのです。94年段階の『ヨーロッパ言語参照枠』ではマルチリンガリズムやマルチカルチュアリズムという言い方をしていました。これらはいずれも英語にある、既存の概念でした。プルリリンガリズムという概念は97年になってようやく複数言語・複文化能力という研究の中で考えられ、その成果は『参照枠』に継承されていくことになりました。

人間の実態に即した複言語主義

外国語教育の中で複言語・複文化能力と言った場合、それはネイティブをめざすものではなく、さまざまなレベルで複

数の言語を習得し複数の文化経験をもつ行為者、学習者について語るものです。言語によるコミュニケーションが取れ、文化的にも双方向的行動が可能である。つまり複数の言語や複数の文化がさまざまなレベルで、個人の中で共存している。共存しているその能力を、自らがある程度管理できる。「プルリ」とは複合的であり、複層的であることです。多言語主義と言った場合は、頭の中が英語の部屋、フランス語の部屋、ドイツ語の部屋などに分かれている。互いの部屋は干渉しないと考えられていました。

しかしバイリンガリズムの研究を通じて、人間の頭の中で、言語というものは必ずしも引き出しのようにそれぞれが個別に入っているわけではなく、むしろ複合的・複層的に組み合わさっているものであり、それらはけっして全部が均等な能力として組み合わさったものではないことが明らかになりました。頭の中に複数の言語があった場合、それらは混じりあった状態で存在している。一つの言語を学ぶ場合、「読む、書く、聞く、話す」という4技能が均等に伸びることはないという前提です。例えばある言語につい

ては話せればよい、ある言語については読めればよい。人間のコミュニケーション活動を仔細に観察すると、言語能力については限定的あるいは部分的に使用されるものがあり、それを認めることによって多様な言語を積極的に学ぶことを考えた方がいいのではないかというわけです。

4 技能を均等に育てるというのはネイティブの話をモデルとした外国語教育観、外国語学習観でした。読めるが話せないのはだめだという、コンプレックスを抱かせるような言語教育観だったと思います。ブルリリンガリズムは、もはやネイティブをモデルとして言語教育を行いません。ヨーロッパでは、例えばレストランのメニューが複数の言語で書いてあり、ウェイターが複数の言語を話すことがあります。彼はメニューについての言語活動はできるが、おそらく文字の読み書きはできない。客と交わす会話や語彙は非常に限られたもので、料理について複数の言語で説明できればいい。いわば口頭の言語能力があればいいわけで、そういうものをモデルとして複数の言語に取り組めばよいのではということ

が考えられています。

欧州評議会では複言語主義のための言語学習を進めようとして謳っており、その中で部分能力という問題が積極的に評価されるようになってきました。とりわけヨーロッパ語の場合、フランス語、イタリア語、スペイン語などはロマンス語を原点として、互いに近いものです。少し学べば読めるようになるわけで、相互理解性が非常に高い言語です。だいたい意味が分かればとりあえず困らないという程度には、比較的短時間で習得できるというような言語教育観を考えているのです。

複言語主義はそれ自体として複文化主義の一部ですから、複文化の方が大きな上位概念としてあり、その中に言語も一つの概念として現れています。そしてこの「参照枠」の中で語られている文化の問題は、言語と文化に見られる異質性に関わるもので、相手の学習言語・学習文化が自分の母語・文化と異なっていることは、文化を通じてその差異を学ぶことが重要なのだと言っているわけです。英語だけを学ぶことはステレオタイプや先入観を逆に強めてしまう。複数の言語を

学ぶことは自民族中心主義を克服しやすく、個人全体の学習能力が豊かになるとヨーロッパでは考えられています。また、複文化・複言語能力を進める場合、移民などが持ち込んだ言語も継承言語として尊重しようという態度が見られます。これによつてヨーロッパで移民との共生を可能にしようというわけです。

複言語主義振興上の問題点

このような言語教育観は既存のものではないため、新たに振興しなければなりません。ただし、さまざまな問題もあります。文化をどのように評価するか。部分能力と文化の問題や教師、あるいは試験制度はどうするのか。人間の言語能力が複合的だとすれば、試験の中でどのようにブルリリンガルな能力を問うのか。ヨーロッパ諸国がもし一つの基準に基づいて言語教育を行い、それを標準化として提供すると、言語教育のもつ複層性や人間の中に複数の言語があるという状態や価値そのものが、すべて職業能力に還元される恐れもあります。

ヨーロッパでは英語の地位が高まってきたいますが、複言語主義は英語を排除

するものではありません。ただ、英語の学習目的は英語ができると社会的上昇できるなど、非常に現代的な表象に結びついていることが多い。とりわけ問題なのは、英語を勉強すれば他の言語は学ばなくていいという考え方を、英語学習が進めやすいことです。したがって「言語学習とは何か」「複数の言語を学ぶことにはどのような価値があるのか」という問題も合わせて教える必要があります。ヨーロッパは言語教育の多様化が重要だと訴えているわけですから、言語教育そのものには相互理解や民主的な社会の構築、社会統合に役立つなど、社会政策的な意義があることを訴えて行く必要があります。

日本における 複言語主義教育の将来

最後に、日本で多言語主義ないしは複言語主義はどのように受け入れられてきたのでしょうか。「多文化主義」は以前からかなり論じられていましたが、多言語主義が論じられるのは90年代後半です。多言語主義を語り始めた趣旨は、ヨーロッパの経験を生かして、いわゆる第

二外国語、それはとりあえずフランス語でしたが、その教育の展望を探るというものでした。それが自然に言語教育だけではなくて思想的なものへと広がっていったと同時に、英語の単一言語支配に対するアンチテーゼともなりました。しかし欧州教育界の複言語主義は、まだこの時代には取り上げられていなかった。複言語主義を欧州評議会が語り始めるのは97年からです。日本で多言語主義を取り上げたところに、ヨーロッパでは複言語主義とは何かが論じ始められたという、いわば一周遅れの状態がそこにはありました。

日本では、04年に『ヨーロッパ言語共通参照枠』が翻訳されました。今年は京都大学で参照枠をめぐる研究会や複言語・複文化等言語教育の研究集会が行われ、多言語の問題が論じられていた状態から今、複言語を論じる時代へと変容しつつあります。日本がヨーロッパの言語教育思想を輸入し始めていることは間違ありません。

多言語主義から複言語主義への移行は欧州統合の問題と切り離せません。日本で多言語主義と複言語主義を論じることに

はできますが、日本は仮に欧州評議会のオブザーバーであったとしても、ヨーロッパの一国ではありません。したがってヨーロッパ統合の中から生まれてきた考え方を、ヨーロッパとは関係ない日本が果たして受け入れられるのか。そのためには東アジアあるいは極東アジアという共同体の中で言語問題をどう考えていくのか、おそらく今後のポイントになっていくと思います。

(2009年9月14日、大学言語文化教育研究センター「第21回京田辺ランゲージ・セミナー」での講演。副業館第1会議室)

略歴

西山教行(にしま のりゆき)氏
1961年生まれ。明治大学講師、新潟大学助教授などを経て2005年度より現職。日本フランス語教育学会理事、日本フランス語教育学会誌編集長、国際ジャーナル編集委員、日本言語政策学会理事。フランス語教育学、言語政策、外国語教育学などを専攻。

「ヤソ」と呼ばれ いじめられた子ども時代

私の故郷、大船渡は岩手県沿岸の南部、のこぎりの齒のように入り組んだリアス式海岸が非常に美しいところです。湖と海という違いはありますが、ガリラヤのイエスもこういう風景の中で暮らしていたんだらうなど、いつも思っています。このような景色の中、丘にある本当に小さな教会、カトリック大船渡教会に私は通っています。

私は昭和15年に生まれました。大日本帝国は、健在とは言わないまでもまだ厳然として存在していて、我々キリスト教徒は江戸時代から続く伝統的邪宗門視で「ヤソ」と呼ばれ、非常に嫌われていました。また天皇陛下を拝まないものからです。大日本帝国の統治下においては国賊ということになり、随分いじめられたものです。私の父にも特高警察がお供のように付いて歩いていました。

私が育ったのは越喜来村です。村の連中は皆いい人なんですが、こと「ヤソ」となると態度が変わる。私は小学校1年生の時に父が死んで保護者がいなかった

レクチャー

わがふるさとのイエス —福音書のケセン語訳から 見えてきたこと—

ケセン語訳聖書翻訳者／医師

山浦 玄嗣



ため、いじめ放題にいじめられました。道を歩いていると「ヤソ、ヤソ」と、馬の糞を投げられる。もつとたちの悪いのは、牛の糞を投げる。あれが当たると、頭から足の先まで糞だらけになる。そういう目にしよつちゅう遭いながら、こつちも負けずに少年十字軍よろしく奮戦していました。

ふるさとに見た 「イエス」と「十二使徒」

そうはいっても、自分が本当に信じていることがまったく相手に通じないのは寂しいものです。ある時、私は防潮林の松林で、ぼけつと冬の海を眺めていました。すると松林の向こうから、馬に乗った村の若い男が来た。民謡を朗々と歌いながらやってきて、私の目の前を通り過ぎる時にひよい、とこつちを向いて、真っ黒なひげの中から白い歯を見せて、にやつと私に笑いかけたんですね。それを見た時、どきつとしました。それは少年の私にとって、イエス様だったんです。イエス様が、寂しい私を慰めるために化けてきたんだと。私は本当に嬉しくて、

しばらくはあの幸せな気分から抜け出さないように、息をするのも怖いほど、じっと冬枯れの松林の中で身を潜めていたのを思い出します。

それからイエズス様はときどき私の目の前に現れました。ケセンでは「気仙大工」が有名で、大工がいっぱいいます。普請をしている家に、我々子どもは五寸釘をもらいにいくんです。「釘うち」という遊びを関西の人もやっただでしょう。すると、カンナを研いでいた若い大工が「おいっ」と言つて、大きな手に錆びた五寸釘2本を乗せて、私の目の前にひょいと出した。大工の顔を見たら、イエズス様でした。イエズス様は大工ですから「ああ、この村にイエズス様が住んでいるんだ」と。すると、あの大工の家のお母さんはマリア様に違いないと思いました。

ある時は海岸で、朝早く地引網をする。手伝うと魚がもらえるので、お日様が出る前から海岸に行つて地曳網をします。すると肩幅の広い、岩のような顔をした男が私に、にこつと笑つた。それがペテロでした。こうして周りをよく見ると、ペテロだのフイリッポだの、ヤコブだの

ヨハネだのがいっぱいいる。私の村にはみんな住んでいるんだと、子どものころは思っていました。子どもの空想です。空想と現実の区別がつかない空想です。

『ケセン語入門』と『ケセン語大辞典』の誕生

友だちにその話をしたが、誰も相手にしてくれません。言い方が悪かったんだろうと思つて聖書を持つてきて読んで聞かせたんですが、これがまた訳の分からないことが書いてある。「まことに、まことに、われ汝らに告ぐ」そんなこと言つたつて、ハナ垂れに分かるわけがない。「何だそれ、ヤソの寝言か」と言われます。私はつくづく悲しくて、「こんな東京の立派な言葉で書いてあるのでは全然話が通じない、だからやつぱり、おらはの言葉で書かねばだめなんだ」と思いました。イエスはハナだつた。気仙大工の仲間ではないか。ペテロだのフイリッポだのヤコブだのもみんな浜人だ、漁師だ。大工だの漁師だのが東京弁などしゃべるか。当時、東京弁など我々にとつては外国語でしたから。イエズス様つてのは本

当にいい男なんだ、男が惚れるような、いい男ぶりをみんなに話して聞かせるためには、おらほの言葉にしなければだめなんだと、子ども心にずっと思っていました。

忘れもしない小学校3年生の時、作文の時間に学校の先生が私に言つたんです。「作文というのは、何も東京あたりの立派な言葉で書がなくなつていいんだ。おまえたちが毎日使っている暮らしのありのままの姿そのまんまを書けば、それで立派な綴り方づうもんだ。」わあ、そうかと思つたですね。でもいざ書くこうしたら、1行も書けなかった。「おらのばつぱ」、つまり「うちのばあちゃん」までは何とか書けたんですが、その後が書けない。「レア」とか「ゑア」のような独特の発音をどう書けばいいのか先生にしつこく尋ねたら、とうとう癪癪を起こして怒られました。その時「ああ、おらほの言葉にア、字はなかったんだ」と思いました。今に見ていろ、おれは立派な字をこしらえてみせると思つたんです。

そう思い続けて35歳になりました。医者になつて、仙台にいました。親代わり

になって優しくしてくれたおじさんが、故郷からひよっこりやつて来ました。嬉しくて一升瓶を空にしてひと晩中話をしたんですが、その時にすごいショックを受けたんです。おじさんの言うことは全部分かったけれど、受け答えをする私の舌が動かなくなつたんですね。標準語なまりになつてしまった。美しいケセン語が出てこない。そこで、自分の舌から失われようとしている愛すべきふるさとの言葉を、もう一回自分の中に確立しようと固く心に決めたわけです。

それから一生懸命、ケセンの言葉の勉強を始めました。勉強といつても自分の頭の中にもともとあるわけですから、それを引っ張り出せばいいだけのことで簡単です。ケセンの言葉を書くためのケセン式ローマ字を考えて、ケセンの言葉はどういう文法で成り立っているか、どういうアクセントの法則があるのかなどを、事細かに自分で考えました。

私は言語学者ではないので、知っている文法は中学校で習った国文法だけです。この国文法たるや、ケセン語の前ではまるで役に立たない。仕方がないから、自分で自分の文法を作らざるをえない。

それでケセン語の文法を作り、『ケセン語入門』という本を出版しました。今からもう24、25年前の話です。東北地方の名もない方言の教科書を作ったわけですから。

方言の教科書としては日本で初めてでした。特に東北地方の言葉はズーズー弁などと言われて蔑まれ、差別されてきたんですが、その教科書を作ったというところで皆がびっくりした。NHKまでが取材に来ました。するとケセンの仲間には「おらほの言葉はズーズー弁なんかでねアんだつたア! フランス語とも英語とも対等の『ケセン語』だつたア!」と非常に喜んで、ケセン・ナシヨナリズムが沸き上がったんですね。この本は酒屋だの魚屋だの八百屋だの床屋だの、ありとあらゆる所で売られました。日本中で評判になって、それから地方文化の復権、方言の復権が日本中に叫ばれるようになった。この本は、その嚆矢になったと思います。

私は大人になってからは仙台にいましたから、私の知っていたケセン語は、どちらかというと子どもの言葉でした。そこで今度は大人の言葉を覚えていき、

『ケセン語大辞典』という、でかい本を作りました。上下2巻で、すべての言葉に豊富な用例が付いています。しゃべる人口が今は7万ちよつとしかない微小言語にこんな大きな辞書を作った人は、あまりいないのではないのでしょうか。2000年、私が60歳の時です。そして、これでやっと聖書を翻訳するペンが手に入ったと思いました。

ギリシア語の原典から始めた 聖書のケセン語訳

この辞書があれば、誰が見ても文法的にきちつとした文章が書ける。ケセン人が一人もいなくても完全に復元できる。そう思つて、新約聖書の四つの福音書を翻訳しようと思いました。それにはイエス・キリストの言行が書いてありますから、生の声が聴けるんです。

ケセン語といつても日本語の方言の一種にすぎません。例えば「牛」と書いてあつたら「ベエゴ」とすればいい。日本には優秀な聖書学者がたくさんいて、優れた研究をいっぱいなさっている。その成果が新共同訳聖書となつて日本中で使

われている。それをケセン語に置き換えれば事足りると。ところが、だめだった。一行も訳せませんでした。

「マタイによる福音書」の最初に、「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」とありますね。これをキリスト教の「キ」の字も知らない人たちにも通じるような言葉にしようと思った途端に、「あれ、おかしい」と思ったんです。「アブラハムの子」って誰ですか、イサクじゃありませんか。あの系図によれば必ずらずと名が書いてあって、イエスは42代目ですね。だから「子」ではなし。「子」というのは第1代目の直系卑属のことを言います。日本の民法にもそう書いてある。第2代目になると孫、3代目は曾孫、そして玄孫。イエスはのずつと後の42代目なんです。ダビデの子でもない。ダビデの子はソロモンであつて、イエスではありません。こんなばかな話、ねアでねアかと思いました。そう思つて見ているうちに、次から次へと分からない言葉が出てくることに気がきました。「人々はイエスにつまずいた」ケセン語では「けつまずく」と言う。そのまま訳すと、イエスがそのへんで昼

寝をしていて、通りかかった人がそれにけつまずいて、すてん、すてんと将棋倒しになったという意味にしかならないんです。私はどうしていいか分からなくなつて、頭を抱えてしまいました。

今年文化勲章を受けた日沼頼夫先生は東北大学の私の先輩です。その日沼先生が、お弟子さんの崎谷満先生を紹介してくださいました。崎谷先生は長崎は五島列島出身、キリシタンの末裔です。医師で聖書学者で、言語学者でもある秀才です。この人に相談した。すると彼は笑つて言いました。「それは日本語の聖書から訳してもだめだ。聖書はもともと何語で書かれたか知っていますか」「2000年前のギリシア語です」「そうです。原典から訳しなさい」

私は相当ショックを受けました。さあ今から聖書を訳そうと思つていたら、今度のは α や β 、 γ なんて字を覚えなさいといけない。すると翌日、崎谷先生からギリシア語の聖書が届き、次の日にはギリシア語の字引や文法書がどさつ、どさつと送られてきた。それからねじり鉢巻で必死に勉強しました。そうしたら、だんだん分かってきたん

ですね。さっきの「アブラハムの子」について言うと、「子」はギリシア語で「ヒュイオス」です。辞書を見ると確かに「息子」です。でもいろんな意味があつて、「子孫」という意味もちゃんと書いてある。なのに、なぜ「ダビデの子」なんて書くんだ。違うだろう、「ダビデの子孫」だろう。あれは「ダビデのご子孫、ばんざーい」と言つたんです。人々がイエスに「つまずいた」話も、あれは「スカンダリゾー」という動詞の訳ですが、「腹を立てる」という意味なんです。人々はイエスの、当時にすればあまりにも非常識な行動にカンカンに腹を立てたという意味なんです。

聖書から追放された「天国」と「地獄」

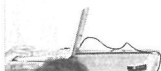
古代ギリシア語の原典から作業を始めた時に、二つの原則を決めました。一つは直接ギリシア語から訳すこと、もう一つは、できるだけ漢語を使わないこと。漢語はもともと中国語ですから、外来語です。もちろん日本語にすっかり取り込まれてしまつて抜き差ししない形にな

っている言葉はたくさんあります。これまで取り去ることは不可能ですから、特に新たな漢語を創らないということです。

これはとても大事なことです。例えば「よげんしゃ」という言葉がありますね。「予め言う者」と普通は書きますが、聖書では「預言者」です。神様の言葉を預かっている人という意味です。そういうふうにはつきり区別されていますが、耳で聞けばどちらも「よげんしゃ」です。私は、耳で聞いても分からない言葉は使わないことにしています。文字で読まないと分からないものは単なる視覚的記号にすぎず、言葉としてのいのちがない。だから「預言者」なんて言葉は使わない。ならば、どうしようか。古代飛鳥時代あたりの日本語に「みこともち」という言葉があります。私はこれを採用することにしました。「みこと」とは「御言葉」。「みこともち」とは、天皇の御言葉を持っている人、それを一般人民に伝える役目のこと、つまりお役人です。耳で聞いただけで分かるんです、ああ、神様の「みこと」を持っている人のことだと。

例えば「天国」。これはすっかり日本

語になりましたが、これもちよつと変じやないかと思いました。天国とは天の国、あるいは神の国です。ギリシア語で「パシレイア」。確かに「国」という意味はありますが、基本的には「パシレウオー」という動詞の名詞形です。「支配する、統治する、治める、取り仕切る」という



意味です。「ルカによる福音書」にありますが、ある人が「神の国はいつ来るんだ」と言ったら、イエスが「神の国はここにある、そこにあるというものではない。おまえたちの間にある」と言った。ところが、日本語の「国」というのは常に、「ある一定の面積を持った土地」ではないといけません。そこに一定の国家主権が存在する状態を言います。「国」は必ず国土としっかり結びついた言葉なんです。しかし、ここにある、あそこにあるというものではないということは、国土とは関係ない。日本語の概念では場所と関係のない国などありません。すると、これを「国」と訳すのはおかしいのではないか。

私は「神様のお取り仕切り」と訳すことにしました。聖書にありますように、人間の幸せ、不幸せはどこから来るか。人が人を支配するから人間のさまざま不幸が起きてくる。だから、そういうことはやめよう。神様は人間がかわいいから人間をお創りになった。人間一人ひとりがどうすれば幸せになれるかを神様は一生懸命考えて、これから取り仕切つてやろうとなさった。これからは、この神

様のお取り仕切りに身を委ねようと、イエスは言っているわけです。そういうわけで、私の辞書から「天国」は追放されてしまいました。

ついでに「地獄」も追放してしまいました。これは「ゲヘンナ」というギリシア語の訳で、「ゲーヒンノム」が語源です。エルサレムの南の方に「ヒンノム」という谷があり、そこでイスラエル人たちが偶像を拝んでいた。自分の子どもを火で焼いて人身御供を捧げて乱痴氣騒ぎをしたという、恐ろしい宗教を信じていました。それで預言者たちが命がけで彼らを、神様の本当の道に引き戻しました。引き戻された人たちは、自分たちのあさましい姿が忘れたいトラウマになったんです。ヒンノムの谷は最も穢れた場所となり、エルサレムで出た汚物は全部そこに捨てられた。死んだ家畜、罪人の死骸もそこで焼き捨てられました。うじが湧き、悪臭を放つ。それを消すために燃やす。ユダヤ人は、人間をゴミ扱いするという理由で火葬を非常に嫌いました。罪人の死骸を焼き捨てるというのは、ものすごい侮辱なんです。ですから彼は「そんなことをしているとおまえたち、

ゲーヒンノムに捨てられるぞ!」と言った。それは極めて具体的な意味を持つているのであり、中世のダンテの『神曲』に出てくるような、おどろおどろしい地獄のようなものではありません。私はケセン語ではこれを「焼き場」と訳しました。

ケセン語で読む「山上の垂訓」—— 「心の貧しい人」とは

本当の幸せについてイエスが語った「山上の垂訓」という話がありますね。「心の貧しい人は幸いである。天の国はその人たちのものである」という、有名な言葉があります。しかしこれをそのままケセン語に訳すと、とんでもないことになります。ケセンでも京都でも、心の貧しい人というのは品性に乏しく、我利我利亡者で自分のことしか考えない人のことを言いますね。「心が貧しい」とは、ののしり、軽蔑の言葉です。すると、心の貧しい人は幸いである、そういう人が神様のお取り仕切りに真つ先に入れるというのは、どう考えてもおかしい話です。そこで原典に当たってみると、「心の

貧しい人」は「ホイ・ブトーホイ・トーイ・ブネウマテイ」とある。「ブネウマ」は「心」です。「ブトーホイ」は「貧乏人」。「心の貧乏人」ですが、ブネウマの本来の意味は「風」「息」です。古代人は、息というのは命だと思っていました。日本語でも、息が絶えた、息を吹き返したと言うと、命がなくなつた、生き返つたという意味になるでしょう。風、息、命、さらには心、魂。これらは全部「ブネウマ」です。

「ホイ・ブトーホイ」とは「縮こまつている人」という意味。力がなくなつて、ふにやふにやとなつていいる人。すると、これは「鼻息の弱い人」ではないかと。不景気で銭つこもねア力もねア、腹へつた、あと頼むのは神様しかいねア。そういう情けない、鼻息の弱い人。要するに貧乏人のことなんです。こういう人は幸いだと言っているんです。

「心の貧しい人」は誤訳ではないんです。逐語訳としてはいいんですが、日本語では別の意味が発生してしまう。そこで私は「頼りなぐ、望みなぐ、心細い人」ア幸せだ。神様の懷に抱がさんのアその人たちだ」と訳しました。そういう人こ

そ、神様の懐にしっかりと抱きしめてもらえるんだと思います。

過酷な社会が生んだ

「柔和な人」

「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」これも、悲しむというよりは「泣く人」。家族が死んで野辺の送りに泣いている人です。そういう人は本当は幸せなんだ。神様が慰めてくださる、神様が一緒に泣いてくださるという意味に訳しました。

「柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ」これも、柔和な人が幸せなのは当たり前でしょうと思うわけです。「金持ち喧嘩せず」と言うように、絹の座布団にすわって、ゆったりとお茶をすすっている大旦那さんは柔和で穏やかですね。反対に、貧乏人はいつもお腹がすいて気が立っているから、しょっちゅう喧嘩をしている。そういう文化の中でこの言葉を見ると、まことにおかしい。

これも原文に戻してみると随分違う意味なんです。ギリシア語で「ブライユス」

と言います。確か「穏やかな、柔和な」という意味がありますが、もう一つ大事な意味がある。「貧乏人」という意味です。なぜ貧乏人が「穏やか」なのか。当時のギリヤや地方の過酷な政治状況を考えると、よく分かります。ローマ帝国が圧政を敷いて、傀儡政権であるヘロデ王が、それはむごい政治をした。自作農はどんどん落ちぶれて小作農になり、さらにはそれも零落して日雇いの労働者になり、重税を課せられるため、果ては借金で首が回らなくなつて家族を失い、奴隷に落ちぶれていく。そういう悲惨な状況があつた。これに反抗する者はあつという間に鎮圧されて、ギリヤのユダの大反乱の時には、街道沿いに実に2000本の十字架が立てられて、ユダと仲間たちが磔にされて殺されました。

イエスは12歳のころにその状況を見ていたはずだ。「泣く人」というのは、そういうのを見て泣いている人なんです。向こうつきの強い人はこうして殺されてしまい、残った人は意気地なしなんです。反抗の気力さえ無くなり、奴隷根性が見え込んだ、かわいそうな人。これ

が「アナヴ」です。だからケセン語の聖書では「意気地なしの甲斐性なし」と言うんですね。そういう人は自分でも情けないと思っているんですよ。でも、本当は幸せなんだ。その人たちは「地を受け継ぐ」、相続財産をもらうわけです。重税で自分の土地もすっかり巻き上げられてしまった。猫の額でいいから自分の畑が欲しいと思つても、ついに得られない。そういう人たちに、神様が相続財産をちゃんと与えてくださるという意味です。それがどういう形で与えられるのかは分かりませんが、地に這いつくばって生きている哀れな百姓たちが「ああ、何かが変わるんだ」と胸躍るような気持ちでこの言葉を聞いたであらうと思います。

「義に飢え渴く人々」とは

次は「義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる」ですね。「義」の元となる言葉はギリシア語では「ディカイオス・ユネー」、ヘブライ語では「ツェダカー」と言い、本来の意味は「神様のお望みになることを行うこと」だそうなんです。では神様は何を求めている

つしやるかというところ、人と人とが等しくあることを求めである。それが具体的に「施し」になります。何も持っていない人がいれば、自分の物を分けてあげて全部でなく、半分でもいい。ユダヤ教の研究者に聞いたら10分の1でもいいそうです。そうやってお互いに助け合う。これが「ツエダカー」。これは乞食の話なんです。施しにありつきそこねて、腹が減つてのどが渴いている人。そういう人は本当は幸せなんだ。神様がやがて腹いっぱいしてくださると約束しているわけです。

次は、この貧乏人に親切にしてくれる人の話です。「心の清い人々は、幸いである」ケセン語では「心根の美しい人」と訳します。がわいそうな人を見たら一生懸命お世話をする。そういう人が、心の美しい人である。「その人たちは神を見る」とありますが、「神様へのお目通りが叶う」と訳すといひのではと思ひます。「憐れみ深い人々は、幸いである」これも、かわいそうな人を見て本当に同情心にあふれる人ですね。我々は「情け深い人」と言ひます。そういう人たちは幸いである、その人たちもまた情けを受

ける。

「平和を実現する人々」の「平和」とは何でしよう。神様のお取り仕切りにやすらぐ心、これが「平和」です。そういうところへ人々を誘つてくれる人が「神の子と呼ばれる」とは、神様が「いやア、こいつはいいやつだ、めんこだなア」と言つて、自分の子どもとしてかわいがつてくださるということです。

最後は「義のために迫害される人々」は、幸いである、天の国はその人たちのものである。「これは正しいことが行われぬために迫害を忍ぶという、何か殉教者みたいな気分になります、実はちよつと違ふのではないか。義が「施し」であるならば、「施しをくれと言つて追ひかけ回す」のが「迫害」なんです。「デイオコー」というギリシア語で、本当は「追ひかけ回す」という意味です。そこから「迫害」という意味も出てくる。つまり貧しい人が「旦那さん、おら腹減つてんだ、どうぞ恵んでけらっせん」と、こちらに寄つてくる。ポケットからいくらかを出して恵んでやる。すると周りにいた他の乞食たちも寄つてきて「おらにも、おらにも」と言う。「ああ、いいよ

いいよ」と施すうちに全部あげてしまふ。それでも「そつちのポケットにもあるに違ひねア」と、まだ寄つてくる。「もう勘弁してくれ」と逃げ回るのを乞食が追ひ回す。これが無慈悲な旦那さんだつたら、ボカツと頭を殴るでしよう。でも優しい旦那さんが来ると、うわーつと、たかる。そういう状況を言っているんだと思ひます。施しをくれくれと言つて追ひかけ回されている優しい旦那さん、こういう人は神様の懐にしっかりと抱きしめられるということだと私は読むわけです。

この「真福八端」つまり山上の垂訓は、最初は貧乏人の話、後はその貧乏人を助けようとする心の優しい人についての話です。イエスのお説教の一番最初にこれが出てくるのは、イエスの教えはこういうものだということを、マタイは最初に書きたかつたんだらうと思ひつています。

ふるさとの言葉で朗読する聖書に 神の声を聴く

ここにケセン語訳の「ルカによる福音書」があります。結構厚いですが。片方のページはケセン式ローマ字、もう一方に

略歴

山浦玄嗣（やまうら・はるつぐ）氏

1940年、東京市大森生まれ。

1966年、東北大学医学部卒業。

1971年、医学博士。

1981年、東北大学抗酸菌病研究所助教授（放射線医学部門）。

1986年、大船渡市にて山浦医院開業、現在に至る。

医学のかたわら、ふるさと気仙地方のことば「ケセン語」の研究に余暇を捧げる。

1990年、岩手県教育表彰受賞。

2002年、大船渡市市政功労者表彰（文化功労）を受賞。

「ケセン語劇団・竈（かまど）けアし座」を結成し代表としてケセン語による演劇活動を行う。

主な著書に、『ケセン語入門』（共和印刷、1986年）、『ケセン語大辞典』（無明舎出版、2000年）、『ケセン語訳新約聖書・マタイによる福音書／マルコによる福音書／ルカによる福音書／ヨハネによる福音書』（大船渡印刷、2002年）（2004年）

漢字仮名まじりで振り仮名を付けて書いてあります。方言はもともと文字で書かれたことのない言葉なので、ケセンの人、この文字を見てもするするとは分からないんですね。耳で聴けば分かるが、字で見ると却って分からない。これはいけないと思うて私は全部朗読しました。ルカの場合は4枚のCDになつていま

す。後ろの方にはケセン語の意味や、私がこういう訳し方をした経緯を私なりの考えで説明しています。もちろん間違っているところもたくさんあると思います。が、そのときはいつでも指摘ください。

ルカの中に放蕩息子のこと話がありますね。私はあれが大好きです。ケセン語に訳すと「竈返し息子」「竈返し」とは竈をひっくり返すこと。竈は家の経済の象徴ですから、それをひっくり返すというのは放蕩で身を持ち崩し、すっかり傾いてしまう人のことです。これを地元で朗読すると、聴いた人がぼろぼろと涙をこぼしました。「ヤソもいいこと言うなア」と。私は本当に嬉しかったです。

ところがある時、ある信者さんが言うんですね、「ヤソというのは差別用語だ。我々はヤソと呼ばれてどんなにひどい目

に遭ってきたか。あんたはそれを分かっている、ヤソという、聞くのも嫌な言葉を使うのか」と。私は言いました。「いいんだ。ヤソという言葉で我々がいじめられたことは確かだ。だから、この名前には尊いんだ」

もし私が「おめアたちはヤソ、ヤソと言つて、ベエごの糞を投げた。おれはあの言葉に恨みがあるんだ、聞くのも嫌だ。そんな言葉は絶対に使わず、『イエス』と言つてくれ!」と言つたとしたら、私の友人は何と思うでしょうか。「ああ、山浦はあのことを赦してねアんだな、いつまでも根に持つてんだな」と思うでしょう。でも、私が「その通りだ、ヤソだ。ヤソつてのはいい言葉だべ」と言つたら、彼らは我々をいじめたことを私が何とも思っていないと分かるわけです。そしてここから、私たちは本当の友だちになれる。だから私は、差別された言葉だからこそ尊いんだと思つています。本日はご静聴ありがとうございました。

（2009年11月13日 大学神学部・神学研究科主催、大学一神教学際研究センター共催による公開講演会の講演を編集し掲載。大学クラークチャペル）